本学衛生看護学科学生が抱く高齢者のイメージの変化
－老年看護学学習前後の比較から学習効果を考える－

森　本　美　佐

はじめに

松下ら[1]が「肯定的イメージは肯定的態度や行動を起こさせ、否定的イメージは行動を規制する。」と述べているように、相手に抱くイメージにより態度や行動が左右されることが多い。高齢社会の現在では、看護の場面でも高齢者と関わることが多くなり、高齢者に抱くイメージが援助の質にも影響を及ぼすといえる。しかしながら、社会の変化により高齢者と接する機会が少ない学生達が、高齢者に肯定的なイメージを持っているかは疑問である。実際、授業の中で、「お年寄りといえば誰を思い出しますか。」という質問に対し、年々「祖父母」と答えるものは少なく、「ちびまる子の友蔵じいさん」というようなマスメディアからの人を答えるなど、身近な高齢者を思い浮かべることが出来ない傾向にある。このことはイメージだけでなく、高齢者への関心度も減少させることにつながる。

そこで私は、老年看護学学習前の学生が持つイメージが、講義や老年看護学実習によりどのように変化していくのかを追跡調査を行ない、学習効果を考えることとした。講義や実習を通して、学生の高齢者に対するイメージは肯定的に変化し、高齢者問題への関心度も高めることが出来ていたなど興味ある結果が得られたのでここに報告し、講義や実習の指針とする。

Ⅰ．研究方法

調査対象は、本学衛生看護学科に平成13年度入学した学生で、途中退学・留年したものを除く80名である。まず平成13年４月の老年看護学概論の最初の授業が始まる前に、アンケートを実施した。調査内容は、祖父母との同居、高齢者に対するイメージ、高齢者への関心度などである。高齢者のイメージは、昨年度の筆者ら[2]の「形容詞対を用いた老人のイメージ」から、行動・性格・外観因子で構成される13項目を抜粋し、否定から肯定の尺度に１点から５点と点数化した５段階評価（ＳＤ法）で実施した。点数が高くなるほど高齢者に対する印象が肯定的であることを示す。又、高齢者を色で表現してもらった。高齢者への関心度は、「話すことが好きか」「高齢者問題の関心度」「高齢者ケアの場への就職の希望の有無」を、５段階に尺度化し一つを選択させた。

このアンケート用紙は、講義前・講義後・実習後と３つの記入する欄を設け、臨地実習終了後まで学生に持たせておき、老年看護学の全講義終了後の平成14年９月と、臨地実習終了後の平成15年１月に実施した。

講義前の調査については、祖父母との同居の有無とイメージや関心度に関連があるのかを統計ソフトExcelを用いて分析した。イメージは、講義前・講義後・実習後の単純平均値とＳＤを調べ、イメー

ジ・関心度ともX²検定を行い、講義前・講義後・実習後の学習状況との関連をみた。

倫理的配慮としては、調査に対して口頭と紙面で、趣旨や調査対象者に不利益が及ぶものではないこと、本研究の目的以外には使用しないことなどを説明した。

Ⅱ．研究結果

1．対象の特性

回収率は、80名全員100％で、すべて有効回答表であった。高齢者との同居経験の有無は、現在も同居しているもの35名、以前同居していたもの15名、同居経験のないもの30名であった。

2．高齢者のイメージ

高齢者を色で表現すると何色かと尋ねたところ、図１のような結果となった。講義前では、グレイ（灰色）が26名（32.5％）、茶色25名（31.2％）と圧倒的に多かった。講義後は、茶色が最も多く、ついで緑色でグレイは大幅に減少していた。実習後はばらつきがみられ、緑色を筆頭にオレンジ、黄色などの明るい色が多くなった。

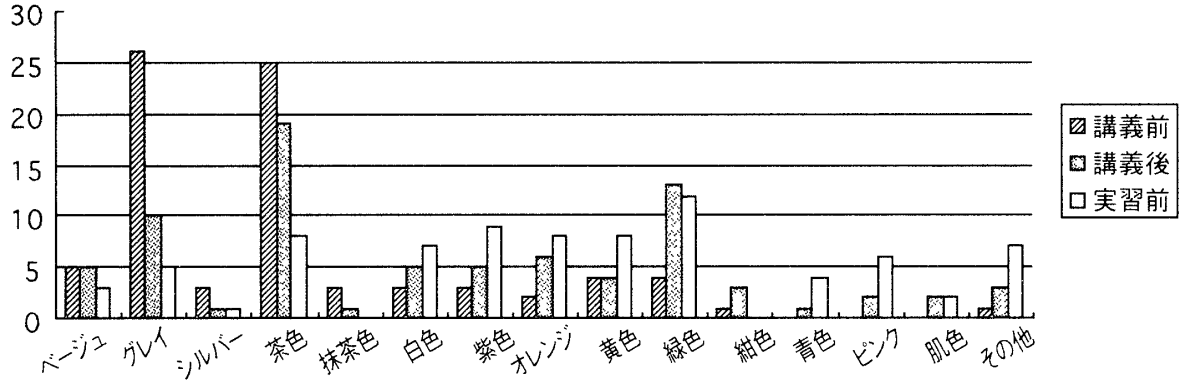

図１．高齢者を色で表現（ｎ＝80）

次いで高齢者のイメージを調べたところ、講義前より「物知りな」「温かい」「おだやか」という項目は平均点が高く、逆に「速い」「あっさり」「強い」といった項目は低かった。表１は、上位３項目と下位３項目の平均とＳＤを表したものである。祖父母との同居経験による差はなかった。講義前の全体平均は3.03であった。

表1．高齢者のイメージ（ｎ＝80）

		平均	ＳＤ
上位	物知りな	4.51	0.67
	温かい	4.14	0.76
	おだやか	3.89	0.90
下位	速い	1.76	0.64
	あっさり	2.14	0.87
	強い	2.46	0.95

図２は講義前・講義後・実習後の比較をしたものである。全体としても学習を積むにつれてイメージが肯定的になっているのが分かる。特に、「強い」「「速い」「あっさり」といった講義前低かった項目は１％水準で優位な関連があった。しかし、「物知りな」に関しては実習後少しであるが平均点の減少がみられた。

図３は、対象者個人の平均点がどのように変化したかを示したものである。＋0.５以上をプラスに変化、±0.5未満を変わらない、－0.5以上をマイナスに変化としてみたところ、図に示すように56名

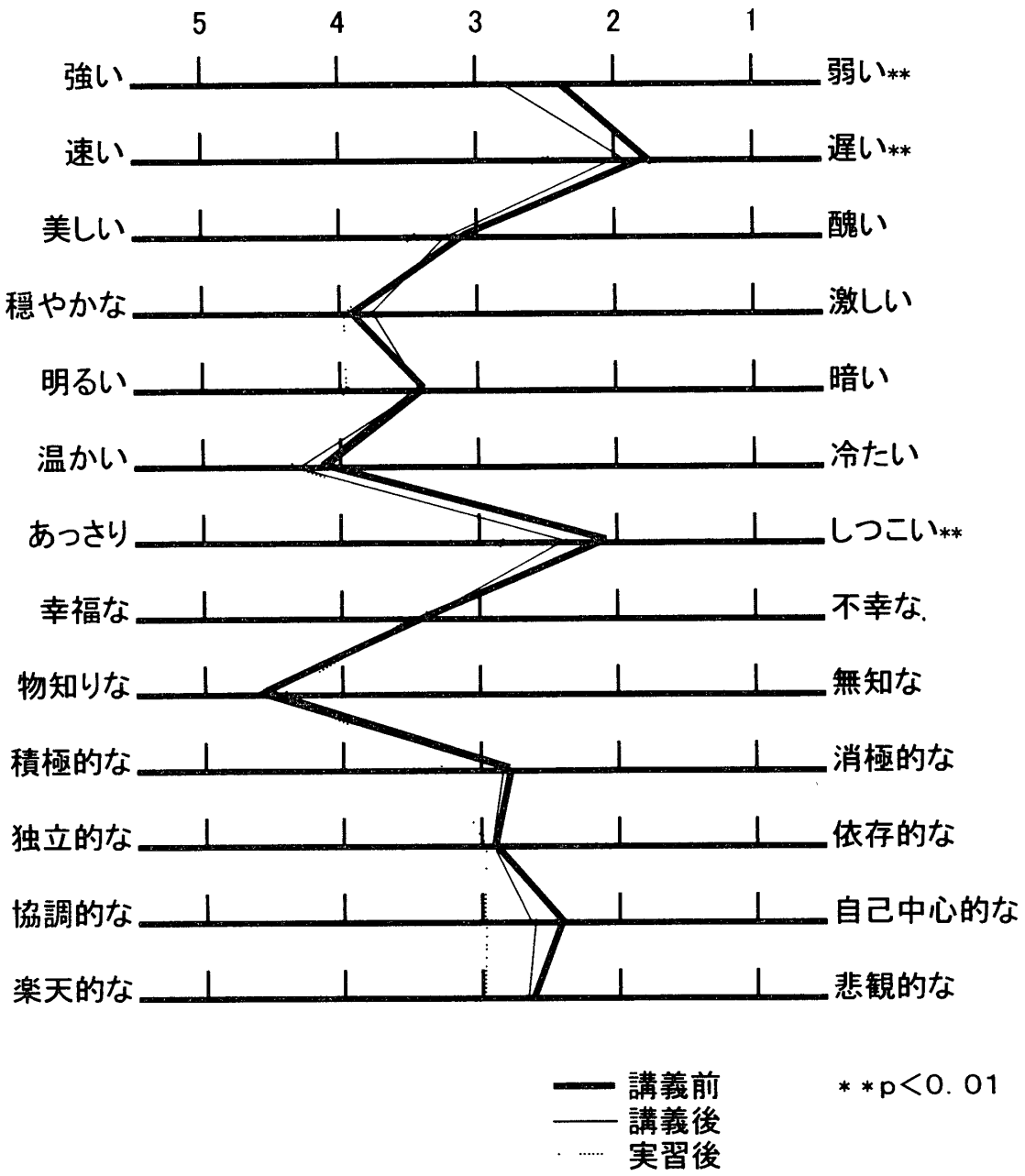

図２．高齢者のイメージの変化（ｎ＝80）

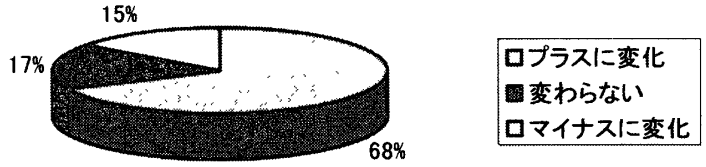

図３．高齢者イメージの平均値の変化（ｎ＝80）

(68%) の者がプラスに変化していた。

3．高齢者への関心度

高齢者への関心度は、「話すことが好きか」「高齢者問題への関心はあるか」「将来高齢者ケアの場で働きたいと思うか」という3点で尋ねた。話すことが好きかという問に対して、図4のように講義前から「好き」「どちらかと言えば好き」と答えた者が多かったが、学習を積むにつれてさらに増加傾向にあり、合わせて85%を越えていた。また講義前には「嫌い」と答えた者も1名いたが、学習後は全くなかった。学習状況と話すことでは、5%水準で優位な関連があった。講義前の答えと、祖父母との同居経験は関連が認められなかった。

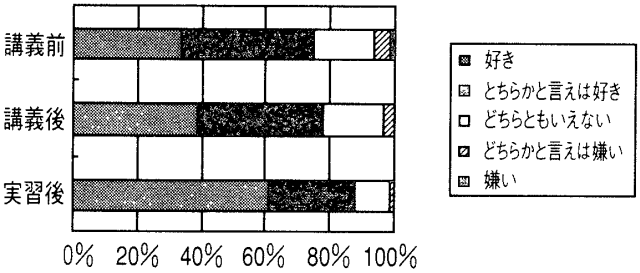

図4．高齢者と話すこと（n＝80）＊p＜0.05

高齢者問題への関心は、図5に示すとおりである。講義前の高齢者問題への関心と祖父母との同居経験は関連がなかった。講義前には「ある」「どちらかと言えばある」を合わせて60%に満たなかったが、学習を積むにつれ増加し実習後には合わせて75%の者が関心があると述べている。講義前には関心がないと答えた者も1名いたが、学習後には全くなかった。学習状況と高齢者問題への関心は、5%水準で優位な関連があった。

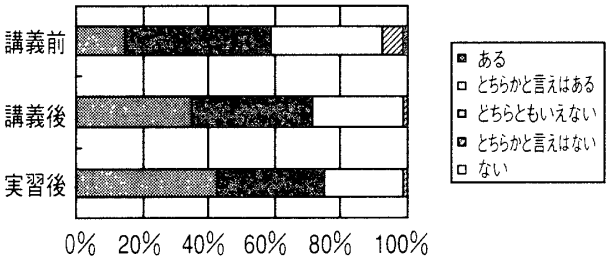

図5．高齢者問題への関心（n＝80）＊p＜0.05

高齢者ケアの場で働きたいかという問に対しては、図6のように、講義前には「どちらともいえない」が半数を占め、「働きたくない」と答えた者は4名いた。祖父母との同居経験による差はなかった。しかし、講義後には「働きたい」「どちらかと言えば働きたい」と答えた者が半数を超え、実習後には60%を越えた。「働きたくない」と答えた者は講義後、実習後も同じ者で1名であった。これは学習状況と1%水準で有意な関連が認められた。

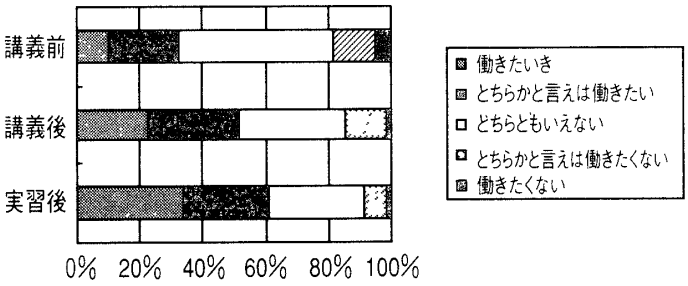

図6．高齢者ケアの場での就職（n＝80）＊＊p＜0.01

Ⅲ．考察

今回の研究では、祖父母との同居経験と、高齢者のイメージ・関心度とは有意差を認めなかった。これは、三輪田[3)]の研究結果と同様である。高齢者をイメージしたり、関心を持ったりするのには、まず自分の祖父母を思い浮かべるのは当然のことであるが、同居経験がなくとも本学の学生たちは、准看護師養成時代に実習の経験があること、またマスメディアを通してイメージを形成していることが原因

であると思われる。

しかしながら、前述の研究に比べ、講義前の本学学生が抱く高齢者のイメージの平均値はやや高く、3.03と中間値に位置している。これは、同居経験がない学生たちも実習経験があり、接触体験の程度が前述研究の対象者よりも多いからであると思われる。「強い」「速い」などの行動因子は否定的なイメージが強く、「温かい」「「穏やか」といった性格・情緒因子は肯定的なイメージを持っていた。「物知りな」という項目では4.51であった。「強い」「速い」といった行動因子は、学習を積み、実習を行うことにより平均値が上昇し有意な関連がみられた。一般に高齢者のイメージの中でも行動因子は変化しにくく、それが変化するためには、接触体験より良い実体験を持つようなかかわりが重要であるといわれている。学生は受け持ち患者を通して、高齢者の力強さなど、もてる力を実感したための変化ではないかと思われる。又疾患を持つ高齢者や老化現象等を学んだ後（講義後）でもこれらの因子は低下しておらず、老年看護学概論の授業において、「高齢者へのインタビュー体験」などを通して得られた高齢者イメージの肯定的な変化を持続することが出来ているのだと考えられる。木村ら[4)]の研究では、「賢い」という項目が卒業前に有意に肯定的に変化していたが、本研究では同様の意味を表すの項目の「物知りな」は平均0.1の減少が見られていた。これは、講義前から平均4.51と高かったことと、実習で受け持った患者により変化したものがいることが原因であると考えられる。

高齢者を色で表現すると、講義前はグレイ・茶色など学生はどちらかと言えば高齢者をくすんだ色で捉えていた。これは谷田[5)]の研究と同様である。しかし学習を積み、実習の後では明るい色で捉えるようになっている。又イメージする色もばらつきがある。講義や実習を通して、病気を持っていても前向きに力強く生きる高齢者と接することが出来たために色の変化が見られたのだと考えられる。

高齢者への関心を見てみると、話すことが好きかという問に対しては、講義前から70%以上のものが、「好き」「どちらかと言えば好き」と答えている。それに対して、高齢者問題への関心度は60%に満たない。この割合は前述の先行研究と比較すると低いといえる。高齢者ケアの場で働きたいと答えたものも約1/3であり、講義前より様々な高齢者問題をマスメディアからの情報により知ってはいるが、真の意味での関心として捉えているものは少ないのではないかと思われる。しかしながらどの問に対しても、学習を積み実習の終了後には有意に変化してきている。これは、講義や実習によりイメージが肯定的に変化したことも原因の1つであると考えられる。又、講義や実習を通して、なかなか高齢者が退院出来ない現状やその社会的理由がわかり、マスメディアからの情報が真の意味で理解することができたためではないだろうか。これらのことから、現在行っている講義や実習は、学生の高齢者に対する関心を鼓舞する事ができていると考えられる。

本学は2年過程の短期大学であるため、老人施設での実習は取り入れていない。しかし、高齢者がいかにして自分の残存機能を用いながら自立した生活が出来ているのかを施設実習において体験していくことが、高齢者の能力を実感し高齢者を肯定的に受け止め、更に高齢者に対する関心も深めていくことにつながるのではないだろうか。又、病院実習においても会話などを通して高齢者の知的な能力を確認することも多い。学生が、高齢者の老化現象を受け止めながら、残存された能力を実感できるような場面作りも今後必要であると考える。

Ⅳ．結論

今回の追跡調査により、以下のことが判明した。

① 本学の学生の老年看護学学習前に抱く高齢者のイメージは平均3.03と中間値で、祖父母との同居経験による差はなかった。

② 本学の学生の高齢者に抱くイメージは、講義や学習を通して肯定的に変化していた。特に、行動因子での変化が著明に見られた。

③ 講義前は高齢者をくすんだ色で表現していたが、実習を通して明るい色で捉える学生が増えた。

④ 高齢者に対する関心度は講義や実習を通して高まり、関心度と学習状況は有意な関連があった。

おわりに

高齢者に対する理解とその看護を深めていくためには、学生が講義前に抱くイメージを把握して授業展開や実習方法の工夫を凝らしていく必要があり、その結果を常に評価していかねばならない。今回の調査により、臨地実習や講義を通して学生のイメージは肯定的に変化し、関心度も深めることができており、学習効果があったといえる。今後も更に学生の変化が見られるよう、講義や実習のあり方を考えていきたい。

文献

1）松下昌子　他　看護学生の老人イメージ－日本とスウェーデンの比較－，看護展望，22（7），828，1997

2）森本美佐　他　老年看護学の対象理解に老年者へのインタビューを取り入れて－インタビュー体験による学習効果を考える－，第13回奈良県看護師等学校専任教員研修会研究発表集録，13－20，2002

3）三輪田隆子　本校看護学生の抱く老年者のイメージ－老年看護学賀九週前の実態調査－，大阪医科大学附属看護専門学校紀要，6，27－32，2000

4）木村誠子　他　看護学生の老人の印象に関する2年後の変化，第34回日本看護学会抄録集－看護教育－，42，2003

5）谷田恵美子　老人看護実習の効果－大学生の「老人イメージ」、「老化による身体的 精神的 社会的変化の理解」－吉備国際大学保健科学部紀要，6，15－25，2001